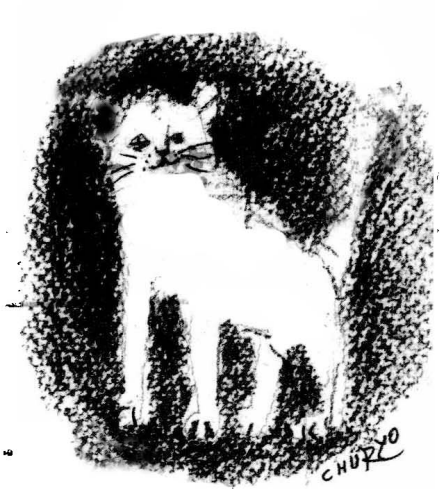
歩きながら

山根基世

山根基世

歩きながら



文化出版局

歩きながら

一九八九年四月十六日　第一刷発行
一九九〇年五月二十二日　第六刷発行

著　者　山根基世
発行者　大沼　淳
発行所　文化出版局
東京都渋谷区代々木三―二二―一
郵便番号　一五一
電話　〇三(二九九)二四八〇(編集直通)
〇三(二九九)二五四二(販売直通)
振替　東京二―一九五六七〇
印刷・製本　図書印刷株式会社

©Motoyo Yamane 1989
Printed in Japan

歩きながら

目次

翔べるように　9

I

たった一人にでも感動が伝えられれば　16
あんずの里のあんず染めの人　23
〝会津〟の人の血の記憶　29
命の河――高麗家五十九代の人々――　36
ささやかな言葉、その重さに気づいたとき　41
幸福への方程式　50
「不易流行」との出会い　58

II

父のアイスクリーム　66
叱ること、叱られること　70

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山の匂い、川の匂い　75
初めての失恋　79
大きな樹　82
金太郎とエソ　85
おばさん　89
栗御飯　92
忘れな草　95
人を愛して　101
詩人猫　111
長女の哀しみ　116
「ゆく年くる年」　121
チコ、おめでとう　126
世間なんか知らなくても　131
「幸福な家族」の思い出　137

Ⅲ

「私」って誰？ 147
男の〝崩れ〟 154
猫の運命 158
終の住処とは 166
青山墓地の藁人形 171
サラリーマンの階段 177
最後の世代 180
別れの情景 185
辛さの奥にあるもの 189
お婆ちゃんの笑顔 193
牛蒡の葉 197
泣く奴、笑う奴 202

挨拶が違う　206
二人の彫刻家　210
あとがき　220

装画　佐藤忠良
装幀　鷲巣　隆

歩きながら

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

翔べるように

私にもようやく分かりかけてきたような気がするのだ。アナウンサーになって十七年、いつだってどこか頭の片隅では考えてきた。インタビュー、人にものをきく、というのはどういうことなのだろうと。今でこそニュース番組全盛で、アナウンサーの仕事の中でもニュースを読むことが大きなウェートを占め、インタビュー番組はほとんど姿を消してしまっているが、十七年前、私たちは今よりずっとインタビューする機会が多かった。それだけにインタビュー論も盛んだった。ことに、ラジオしかない時代からずっとインタビューを追究してきたアナウンサーにとって、インタビューは出演者との勝負である以上にディレクターとの勝負でもあった。そのころのアナウンサー、ディレクターそれぞれのインタビュー論は互いに辛辣(しんらつ)である。「インタビューというのは相手の話すことをわかるということなんだ。それを、質問することがインタビューだと思っているアナウンサーがいるから困る」と、もちろんこれはディレクター。

「インタビューは息づかいなんだよ。相手が何を言ったかということよりも、彼が考えて話す過程でどんな息づかいをするかが面白いのに、編集でその息づかい、間を落としてしまうディレクターがいるから困る」とアナウンサー。自分がインタビューした録音テープは絶対に編集させないというアナウンサーもいれば、いくら長くきいても無駄だから、そのアナウンサーの時は録音テープは一本しかまわさないなどというディレクターもいた。すべて仕事の上での一対一の力関係で決まる。まさに勝負なのである。

そんな議論を耳にしながら、入局間もない私は「女性手帳」というテレビのインタビュー番組を、男性の先輩アナと二人で担当するようになった。そのころの私は、インタビューが何なのか皆目わからないまま、ひたすら、男性アナの思考回路を邪魔せずに、自分のききたい質問をどこにさしはさむか、だけに腐心したものだ。やがてインタビューの経験を重ねるにつれ、ある時は、インタビューとは相手から〝良い言葉〟を抽き出すことだと思え、またある時は、相手の話しやすい、話す気にさせる状況をつくってあげることだと思えたりした。しかし本当のところ、わからなかったのである。自分がインタビューの中でいったい何をすればよいのか、何をめざせばよいのか。だからいつも手探りだった。それが、先日インタビューしていて、天啓のように閃いたのだ。「ジャズのアドリブと同じだ。その時間を相手と共に生きることだ」あるいは一緒にワルツを踊ること、相手にすっかり体を預けながら、それが相手をリードする

ことにもなるように。一緒に空を翔けめぐること、相手にぴったりついて、高くなり低くなりして。

内田光子さんは世界を舞台に活躍するピアニスト。ことにモーツァルトのピアノソナタとコンチェルト全曲演奏は、かつて誰も挑戦したことのない冒険で、世界中の話題となった。すでにソナタ十八曲は完成。現在コンチェルト二十一曲のうちの何曲かをレコーディングし終え、高い評価を受け、モーツァルトの女王と賞讃を浴びている人である。スタジオに来てくださった内田さんは、黒いセーターとパンツ。右肩に白っぽいストール。パーマのかかったセミロングの髪は洗いっぱなし、そしてまったく化粧気のない素顔。私と同い年だというのに、なんと堂々とした存在感。嫌味のない爽やかな自信が、彼女を明るく輝かせていた。彼女は飾らず、率直で自由だった。彼女を見ていると「をんなが附属品をだんだん棄てると／どうしてこんなにきれいになるのか。」という高村光太郎『智恵子抄』の一節を思い出した。彼女の美しさは無駄なものを切り捨てた精神の輝きそのもののように思えた。彼女は音楽をまったく分からない私に、ピアノのキーをフォルティシモで叩き続けるような早口で話してくれた。音楽の不思議を、モーツァルトの魅力を。

コンサートではすばらしい演奏をきかせる音楽家が、レコードになると慎重になりすぎて退屈な演奏をする場合が多いという。コンサートでは当然ありうるささやかなミスもレコードで

は許されない。完璧なものが求められる。したがってレコーディングの時には慎重にもなるし、間違えれば何度でも同じ所をやりなおすことになる。しかしやり直して前より良くなることはほとんどないという。内田さんはいう、「楽しめるレコードというのは決して完璧な仕上りのものではなく、演奏体験を感じとることができるものだと思います。だからレコーディングで自分に誓っているのは、決して完璧なレコードを残そうとは考えず、より生きた演奏を伝えるものにしようということです」。

インタビューもまったく同じだと気づいたのだ。誤りのないことだけをめざし、型だけ完璧に整っていても、心の動きの感じられないインタビューはつまらない。事前にどれほど資料を読みこみ、質問項目を並べたて、話の組みたてを計算しても、いざ相手に向かいあった時、そんなものからは自由であるべきなのだ。どれだけ自由でいられるかが、話の鮮度を決める。話しているその瞬間に湧き上がってくる疑問、こみ上げてくる感動をこそ大切にすべきなのだ。相手と一緒にノッてアドリブで演奏できるような、一緒に踊れるような、翔べるような——自分の心をそんな自由な状態にしておいてやることが何より大切な心構え。「インタビューする三十分なり一時間なりの時間を、自分らしく生き生きと生きること」これがインタビューって何だと考え続けて十七年めに出た、とりあえずの答えである。今後私がもう少し成長すれば、また答えも変わってくるかもしれないけれど。

それにしても、そんな当り前のことを分かるのに十七年もかかったのかなどと笑わないでほしい。まだこの先があるのだ。〝分かる〟ということと〝できる〟ということは別のことなのだ。ようやく分かってきたことも、さあそれが実践できるかとなると……。できるようになるまでにあと何年かかるだろう。道は遥かである。それにしても若くて何も分からない間、やみくもにインタビューし、ようやく分かりかけてきたころにはその機会は減り、おそらくできるようになったころにはもうお払い箱。人生ってなんて皮肉なんでしょう。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com